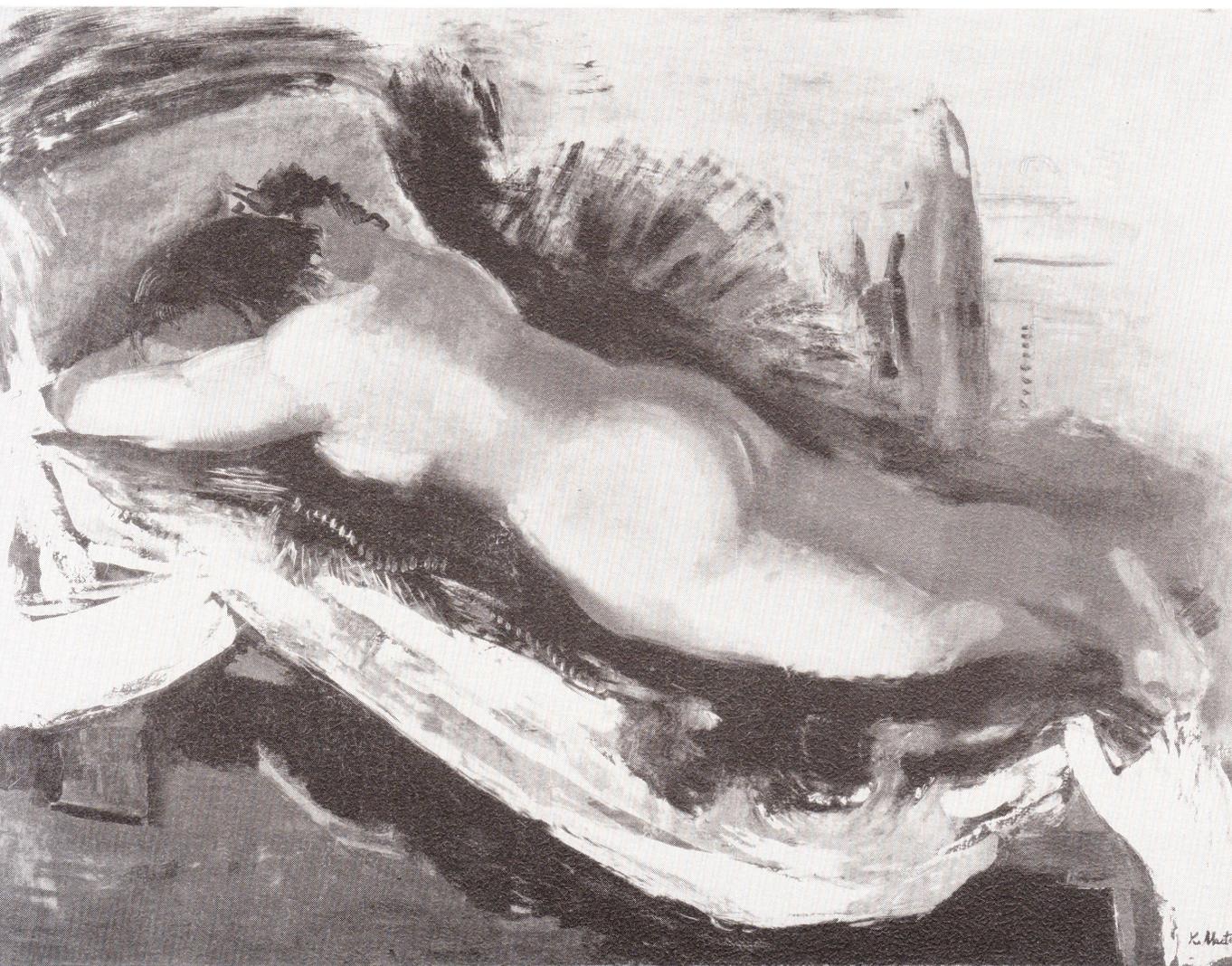


特別展

前田寛治

会期 昭和63年4月5日(火) - 5月22日(日)



伏臥裸婦 昭和3年(1928) 鳥取県立博物館蔵

講演会

4月16日(土)午後2時~

「寛治の生涯と時代」

瀧 悌三氏 日本経済新聞編集委員

渋谷区立松濤美術館

前田寛治が生きた時代、大正から昭和初期にかけては、日本近代洋画が激しく揺れ動いたときであった。帝国美術院展（帝展）、二科展といったそれまでの団体に加え、国画会、春陽会、槐樹社などのグループが生まれ、それぞれの主張のもとに活動していた。根底には、西欧絵画の新たな展開、つまり、後期印象派、フォービズム、キュビズムなどの新思潮を吸収し、わが国において開花させようとする考えがあった。

そうしたなかで特筆すべきは、いわゆる前衛美術の著しい台頭がある。未来派美術展を発端に、ダダ的要素の強い「アクション」「マヴォ」といった団体が形成された。また、左翼運動の一貫として活発になったプロレタリア美術の席捲がある。

こうした、さまざまな様式が錯綜するひとつの時代の転換期でもあった。前田寛治は、このなかで自らの主張する独自の写実理論を掲げ、意識的に時代を作っていた。

[生いたちから留学まで]

前田寛治は明治29年(1896)山陰・鳥取に生まれた。その土地は、深く蒼い日本海と、低く連なる山並に挟まれた農村風景がつづく。東京美術学校に入学したのちもたびたび帰郷し、郷里の美術・文学運動の団体「砂丘社」に参加している。寛治が留学の決意をしたとき、その費用を援助したのは郷里の人々であった。寛治の支えはつねにこの土地にあった。また、「砂丘社」の指導者であった中井金三は、倉吉中学の図画教師であり、コロールの伝記を読み感銘をうけた寛治にデッサンの手ほどきをしている。

東京美術学校卒業後、帝展、二科展に初入選をするな

ど次第にその頭角をあらわしてくる。しかし、倉敷で大原コレクションの西欧絵画に強烈な印象をうけ、美校の仲間が相次いでパリに留学してゆくのをみるに及び、寛治もついに渡仏の決心をする。

大正11年(1922)、12月横浜港より榛名丸でパリにむけ出航する。

[滞仏時代]

パリでは中山巍が*出迎えていた。

当時のパリは、異邦人がつどい芸術を育んだエコール・ド・パリの時代であった。その自由な雰囲気のおかげで、寛治は生活に困窮しながらも懸命に絵画の研究に打ち込んだ。寛治自身が「パリの豚児」と呼んだ仲間たちとの交流は、帰国後も強い絆で結ばれていた。

「そのポーブルな出資の合計で出来る集まりこそは、宛然とした大家族の生活と同じくらいに、満ち満ちた有様で行われた。そして最後には、今度こそ本物の豚の子のように長椅子の上にはもちろんのこと、床の上にも外套を敷いたままカラーだけ外してゴロゴロと寝て宿りこんでしまう……………」

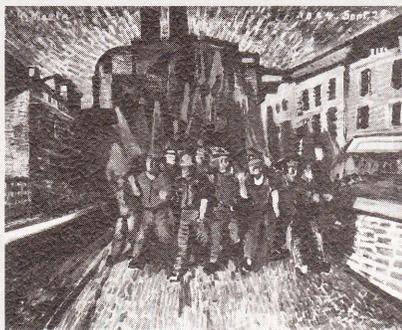
『パリーの豚児等』より

里見勝蔵、小島善太郎、中山巍、佐伯祐三、中野和高、音楽家の林龍作、川瀬トモ子といった仲間たちである。

寛治は西欧絵画の伝統とフォービズム、キュビズムといった新たな展開をまのあたりにし、さまざまな画家に影響を受けた。オーヴェルのゴッホの墓にゆきそれを描いている。また、彼が心酔していたセザンヌの研究のため画塾にも通った。倉吉中学の同窓、左翼運動の理論家福本和夫とのパリでの再会で親交を深め、その影響からキュビズムの影響色濃い労働者、工場といった題材を多



麦わら帽の子
大正9年(1920)頃



メーデー
大正13年(1924)



黒衣婦人像
大正14年(1925) 東京国立近代美術館蔵

数描いている。しかし、決定的となったのはクールベの絵画との出会いであった。

多くの仲間たちが、最新の傾向を追求するなか、寛治はむしろアングル、マネ、クールベに惹かれていった。神話を拒否し「見えないもの、存在しないものは描かない」と宣言したクールベのリアリズムが寛治の心を強く揺さぶった。滞欧時代の後半は、このリアリズムを彼なりに解釈し、研究することとなる。そして、現在も残っている数多くの傑作を生み出した。

[1930年協会の結成]

前田寛治の日本における活動は、2年半の留学から帰国した大正15年(1926)から昭和5年(1930)に世を去るまで、僅か5年に満たない時間であった。しかし、その残した足跡は大きい。

帰国後、第6回帝展では滞欧作を出品し特選となり、日本の洋画壇に華々しく登場し一躍新進画家として注目をあつめた。一方、留学時代より仲間と語りあい構想していた「1930年協会」を、佐伯祐三、里見勝蔵、木下孝則、小島善太郎と結成する。総じてフォービズムの傾向を示したこの「1930年協会」は、当時の美術界に新しい絵画の興隆として波紋を投げかけ、多大な影響を与えた。寛治は多くの評論を発表し、前田写実研究所を開設するなど、理論的指導者として中心的な役割りを果たした。

「およそ絵画の写実的要件としては、

- 一、質感を得ること
- 二、量感を得ること
- 三、実在感を得ること

である。」 『写実技法の要訣』より

前田寛治の追求したものは、一貫して写実理論とその

実践にあった。それは、単なる西欧絵画のリアリズムの模倣ではなく、理知的な姿勢で自らの独自の表現にまで昇華させている。端正な表現による静謐な婦人像、実在感のある裸体などの人物像を次々に制作した。

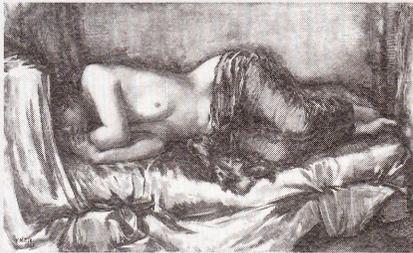
寛治は1930年協会の他の仲間とは絵画理念を異にしていた。しかし、随所にみられるフォービズム的傾向は、佐伯祐三、里見勝蔵らがヴラマンクに影響をうけ、いわゆる“日本のフォーブ”の萌芽を生み出したことを考えると、寛治がその傾向にけっして無縁ではいらなかったことを思わせる。

あくまで、理論的に考え冷徹な知性で造形を構築しようとした寛治であるが、残された作品のなかにも見えるもの、原色に近い青色、赤みの強い印象的な茶褐色、そして熱気をはらんだ筆触は、最期まで止むことのなかった内なる情熱のあらわれでもあった。

『病床日記』中の有名な一節に次の言葉がある。

「写実！それは異常な意識の統一力と強靱な体力を要する。」

晩年のモチーフである海の取材をした銚子・犬吠崎から帰りほどなく、耳の痛みを訴え入院する。それから一年に満たない闘病生活ののち、激しく、そしてあまりにも短い33年の生涯を閉じることになるのだが、入院直後の約一ヶ月間書かれたものがこの『病床日記』である。最期まで病床で描きつづけた寛治は、文字どおり体力の続くかぎり制作し、死の間際まで絵画について思い巡らす強い執念がうかがえる。寛治は、写実ということの意味を、生命を賭して追求しようとしていた。



横臥裸婦

昭和3年(1928) 鳥取県立博物館蔵



棟梁の家族

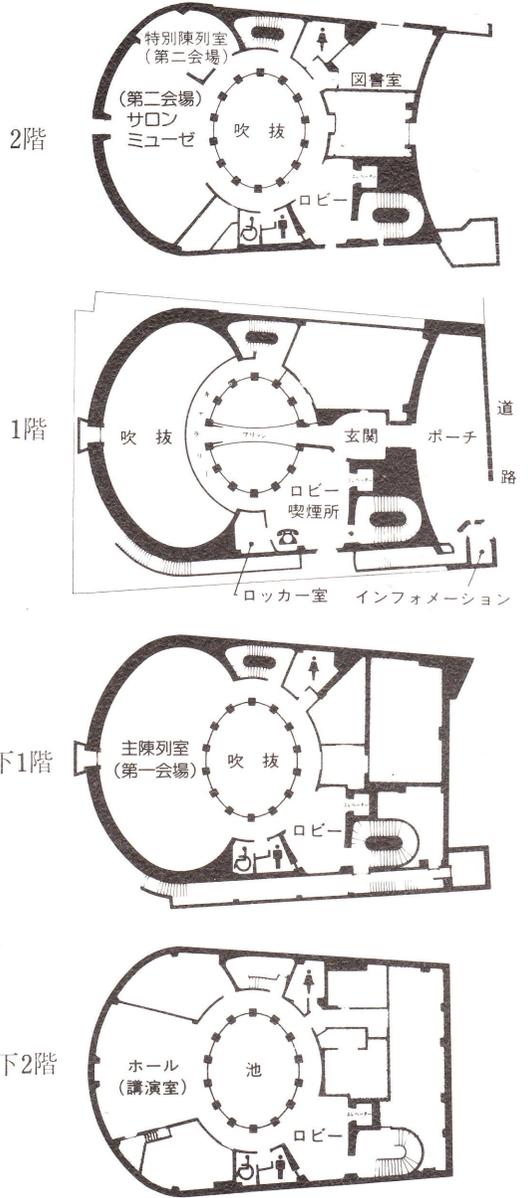
昭和3年(1928) 鳥取県立博物館蔵



海

昭和5年(1930) 倉吉博物館蔵

松濤美術館・平面図



● 美術相談

美術作家を招き、皆さんの作品を見ながら、技術指導や相談を行います。美術史・美術図書の相談にも応じます。

★相談日時・相談員

4月24日(日) 午後1時～4時

洋画家 磯村 敏之氏

日本画家 戸田 康一氏

5月15日(日) 午後1時～4時

洋画家 宮田 翁輔氏

日本画家 荒井 朝吉氏

★申し込み方法 事前に電話で相談内容をお知らせください。

★料金 入館料のみ

● 美術映画館

4月17日(日) 午後2時～3時

コロー、ミレー、クールベ

(I) — 画家はなぜ風景を描くのか —

(II) — 彼らは究極には人間を描いた —

5月1日(日) 午後2時～3時

セザンヌ — その孤独のまなざし — (I) (II)

● 会 期 昭和63年4月5日(火) — 5月22日(日)

● 休館日 第2日曜日及び他の週の月曜日、祝日の翌日

※連休にともない会期中の休館日は以下のとおり変更いたします。

4月10日(日)・18日(月)・25日(月)

5月6日(金)～11日(水)・16日(月)

● 開館時間 午前9時～午後5時 (ただし入館は4時30分まで)

● 入館料

	個人	団体(20人以上)
一般	200円	160円
小中学生	100円	80円

案内図

